

異文化への脱出

Yoshimura Jiro
Faculty of Language and Cultures, Kyushu University

<https://doi.org/10.15017/1274009>

出版情報：英語英文学論叢. 54, pp.59-71, 2004. The English Language and Literature Society
バージョン：
権利関係：



異文化への脱出

吉村治郎

1

ロレンス文学は1913年に発表した小説*Sons and Lovers*を契機として質的にも技法的にも大きく変貌していく。この作品は母からの精神的自立とその葛藤を描いた、いわば若きロレンスの自画像ともいべき自伝的小説であるが、登場人物の性格造形は従来の伝統的手法を受け継いでいる。つまり、母と子、父と子、男と女といった固定した社会的人間関係や、知性、教養、階級、宗教、等々、いわゆる伝統的に継承されてきた社会的価値観を視点として登場人物が創造されている。一方、二年後の1915年に書かれた小説*The Rainbow*では旧来の人格描写は見られず、全く異質な視点を認めることができる。例えば、この小説の冒頭はいきなり次のように始まる。

男たちは天と地の交わりを知っていた。日の光は大地の胸に、そしてはらわたにしみとおり、雨は昼間に吸い上げられる。・・・男たちが牝牛の乳房を揉むと、牝牛たちは乳をしたたらせ男たちの手にその鼓動を伝え、乳房の血の鼓動が男たちの手の鼓動と響き合う。

They knew the intercourse between heaven and earth, sunshine drawn into the breast and bowels, the rain sucked up in the daytime.....They took the udder of the cows, the cows yielded milk and pulse against the hands of the men, the pulse of the blood of the teats of the cows beat into the pulse of the hands of the men. ⁽¹⁾

ここには、天と地の官能的な交流と、マーシュ農場における牝牛と男たちと

(1) D. H. Lawrence, *The Rainbow* (Harmondsworth: Penguin Books Ltd.,1979), p. 8.

の血の交歓が見事に性的イメージで描かれている。そして、*Sons and Lovers*に見られた社会的価値観はほぼ完全に一掃され、代わって、キリスト教では従来、劣悪な欲望の潜む暗黒の場として禁忌され、抑圧を受けてきた人間の「肉体」と「血」が伝統的禁制を破るがごとく主役として前面に登場する。男たちの「肉体」と「血」が搾乳を媒介として牝牛のそれと互いに反応しあっているのである。こうした「肉」と「血」の交歓がこの小説を官能的なものにしているのだが、この息苦しいまでの官能の横溢ゆえに猥褻文書として *The Rainbow* は出版後二ヶ月足らずで発禁処分を受けることになる。

ロレンスは、*Sons and Lovers* を発表した後、よき理解者であったエドワード・ガーネットに宛てた1913年12月30日付けの書簡の中で、後に *The Rainbow* と改題して発表することになる *The Wedding Ring* という小説をとりあげ、「それは『息子と恋人』とは全く違うものです。ほとんど別の言語で書かれたものです。私は二度と『息子と恋人』のような書き方をするつもりはありません。」(It is very different from *Sons and Lovers* : written in another language almost. I shan't write in the same manner as *Sons and Lovers*.)⁽²⁾と述べている。このことから、*The Rainbow* が今までとは全く異なる新しい文学を意図して書かれたものであることは明らかである。登場人物の描き方についても、1914年6月5日、同じくガーネットに宛てた書簡の中で、「私の小説の中で登場人物に従来の固定した自己というものを求めてはいけません」(You mustn't look in my novel for the old stable *ego* of the character)⁽³⁾と警告している。この警告は人格を描写する従来の伝統的な人物造形を放棄する宣言と受け取ってよい。こうした人物造形の変化、ひいてはロレンス文学の変質は、単なる表現技術の変化に基づいているのではなく、人間に対するロレンス自身の認識の変化に起因していることは確かだ。

従来、キリスト教は人間を理知と理性を備えた精神的存在と捉えてきた。理知と理性こそが他の動物と人間とを区別する所以であったし、そこに人間の本質を認めてきた。ロレンスは当初はそうした伝統的人間観を受け入れていたが、やがて独自の視点から人間を眺めるようになる。彼は、キリスト教が直視をためらっていた人間のもう一つの属性に着目する。いうまでもなく、

(2) D. H. Lawrence, "Letter to Edward Garnet," 30 Dec., 1913 in *Selected Literary Criticism*, ed. Anthony Beal (London: Heinemann, 1978), p.15.

(3) Lawrence, "Letter to Edward Garnet," 5 Jun., 1914 in *Selected Literary Criticism*, p.18

それは人間の肉体である。人間は精神的存在である前に何よりも肉体を備えた存在とみなした。そしてロレンスは、肉体を悪の宿る場とする従来の見方を拒否し、反対に叡智の宿る神聖な場として畏敬した。ロレンスは肉体こそ人間の本質であるとみなしたのである。ここに有名なロレンスの「血の信仰」⁽⁴⁾が始まるのだが、彼は肉体の深奥に宿る意識を“blood-consciousness”（「血の意識」）と呼ぶこともあれば、“inner self”（「内なる自己」）、“otherness”（「他者」）と呼ぶこともある。*The Rainbow* はまさに人間に対するこうした意識の変革期に創作された野心的作品である。小論ではロレンス文学の根幹をなす、この“otherness”信仰が生まれた過程とその特質をキリスト教文化との関連で検討すると同時に、その文化的意味を考えてみる。

2

人間を霊肉二元論でとらえるキリスト教は、人間の肉性を認めつつも、全面的に霊すなわち精神性に重心をおき、理知や精神性をもつところに、他の動物に優越する人間の本質をみる。一方、ロレンスは人間を何よりもまず肉体を備えた存在とみなす。つまり、一個の生命体とみなす。理知はこの生命体が生きている証として放つ光である。いいかえれば人間は生命という一本の蠟燭であり、人間の理知や知性は、その蠟燭の先に灯った光にしか過ぎないと彼は考える。ロレンスは人間の本質は生命体としての属性にあるとし、そこに宿る直感や本能は理知や知性に優るものとして信奉し畏敬した。いわば理性中心の伝統的人間観にロレンスは真っ向から反逆したのである。もちろん、彼は、単に反逆することのみ意義を見出す空しい反逆者ではなく、それなりの理由があった。

一つは現代文明にたいする危機感である。ヨーロッパ現代文明の本質は科学的精神にあると考えたロレンスは「われらの科学とは死の世界に関する科学である」（“Our science is a science of the dead world.”）⁽⁵⁾と述べて科学を糾弾している。科学とはもちろん人間の理知が作り出したものである。そして、ロレンスも指摘しているように、その基本的原理は「因果律」“cause-

(4) D. H. Lawrence, “Letter to Ernest Collings,” 17 Jan., 1913, in *The Portable Lawrence*, ed. Diana Trilling (New York: The Viking Press Inc., 1947), p. 563.

(5) D. H. Lawrence, *Fantasia of the Unconscious / Psychoanalysis and the Unconscious* (Harmondsworth: Penguin Books Ltd., 1975), p.12.

and-effect”⁽⁶⁾である。すなわち、科学とは、対象を「原因」と「結果」の関係で説明することで対象を理解しようとする精神である。しかし科学的分析によって得られる知識は、単に対象の持つ現象に関する部分的知識にすぎず、本質的知識とはいえないとロレンスは考える。それは対象についての冷たい「分析的知識」であって、彼の理想とする、生きた知識ともいふべき「全知」とは程遠いのである。しかも、この方法には重大な欠陥がある。すなわち、見られるものと見るものとの間に、裁断される側と裁断する側という上下関係を必然的に生むからである。いいかえれば、支配される側と支配する側という二極化を招く。もちろん支配する側に立つのは分析をする側の人間である。従って科学的態度で対象に望む限り、対象に対する尊敬や畏敬の念が起る余地は全く無いといってよい。西洋文明に見られる顕著な特徴の一つとして、自然に対する人間の侵略的かつ支配者的態度があるが、それは西洋文明の特質である科学的精神に本来そなわっている特質がもたらす必然的結果といえる。いうまでもなく、ロレンスは人間を取り巻く自然を創造的神秘の支配する神聖な場とみなし、人間を超えた実在とみなす。したがって、自然と人間との本来の位置関係を誤認させ、人間に驕りをもたらし性質を持った科学的現代文明は、少なくともロレンスにとって危険な文明とみえた。

科学的性格を持つ現代文明は自然と人間との関係のみでなく、人間関係にも危機的な影を落とす。真のsympathyは相手を真に理解するために不可欠であるが、科学的態度でのみ臨むかぎり真の理解に到達することはできない。科学的態度、すなわち理知的分析は相手についての冷たい分析的知識を提供してくれる。人はそれを寄せ集めて自分なりに相手の像を作り上げる。出来上がった相手の像は一面の真理を抉っているとはいえ、それをもって相手の全てを理解したことにはならない。分析の網に捕まることなく網目を潜り抜ける重要な情報も数多くあるからである。むしろ捕縛を逃れた情報の方が量的に勝るかも知れないし、質的に重要なものが含まれるかも知れない。従って、その像はあくまでも相手についての断片でしかない。ロレンスの言葉を借りるならば、理知による分析は相手を断片化するだけである。ロレンスは次のように述べる。

科学者にとって私は死人そのものだ。彼は死んだ私の一かけらを顕微

(6) Lawrence, Fantasia, p. 12.

鏡にかけ、その像を私であると呼ぶ。彼は私を断片化し、最初はある断片を、次にまた別の断片を私だという。

To the scientist, I am dead. He puts under the microscope a bit of dead me, and calls it me. He takes me to pieces, and says first one piece, and then another piece, is me. ⁽⁷⁾

もう一つ見逃してはならない点は、理知的分析は相手を単なる分析の道具と化す一方、分析者に知的支配権を与えることだ。対象を理解するとは対象に対する支配権を握るという一面があり、それが人に一種の満足感と安心を与える。このようなマイナス面のある理知的分析を唯一の道案内として人間の世界に踏み込む限り、正常な人間関係を作り上げることはできない。そこではいびつな人間関係が成立するのみである。そしていびつな人間関係は双方をいびつな人間におとしめる危険すらある。もちろん、ロレンスは理知的分析法を全面的に排しているのではなく、一つの方法とみなす限りにおいては有効な方法として、それなりの価値を認めている。ロレンスの危惧は現代社会全体が理知に基づく科学的分析法を唯一無二の方法として絶対視し、他を省みない点にあった。そして人間関係の不毛は、無反省な科学精神万能主義に原因があることを知った。社会全体が、そして文明全体が怒濤のごとく科学精神へと傾斜している現状を目の当たりにして、ロレンスは社会全体が過ちを犯し、滅亡の危機に瀕していると直覚した。そして、理知による分析法に強い不信感を抱いた彼は、理知に代わる別の認識法を求めねばならなかった。それが理知とは対極にある「血」による認識法であった。

ロレンスが「血の信仰」すなわち人間の内なる“otherness”への信仰へと傾斜していったもう一つの要因は彼なりの人間観である。人間と思考能力との関係についてロレンスは次のように述べている。

人間は精神が空っぽのままでは眠ることさえできない。精神は空白を拒否するからだ。頭脳という石臼は命の流れが続く限り臼を挽き続ける。そして、石臼は精神にある想念という穀物がどんなものであっても絶え間なく挽き続けるのだ。

Man cannot even sleep with a blank mind. The mind refused to be

(7) Lawrence, "Why the Novel Matters," in *Selected Literary Criticism*, p.104.

blank. The millstones of the brain grind on while the stream of life runs. And they grind on the grist of whatever ideas the mind contains. ⁽⁸⁾

この一文はOn Human Destinyと題したエッセイの一部であるが、タイトルの示す通り、人間は寝ても覚めても思考して止まぬ存在だということである。これは文明人に限らず、アフリカの未開民族であっても決して例外ではなく、思考して止まぬのが人間の宿命であると、ロレンスは考える。つまり、人間は思考という牢獄に繋がれた囚人なのである。彼はそのような宿命を背負った人間存在を「家畜化された動物」(“domesticated animal”) ⁽⁹⁾と呼んでいる。本能に従い、本能によって生き、意識の分裂を知らない、それゆえに濁りのない純粋な生を約束されている他の動物や植物は自然に密着し、自然の摂理に従って生きているが、人間のみ思考力を持つゆえに自然から遊離した存在だということである。人間のみ大地から前足を離して立ち上がり、二本足で歩行するのはそれを示唆して極めて象徴的といえる。そして、思考して止まない人間のこうした宿命的性向は、科学的精神を本質とする現代文明によって一層刺激され助長される。その結果、現代人は自意識過剰に悩み、それは時として神経症的症状を呈する。そして現代人の持病ともいえる自意識過剰症は当然、人間関係にも影響を与えずにはおかない。自意識を捨てることは自己の喪失であると錯覚し、自意識の放棄を何よりも恐れる現代人は徹底して自己にこだわる。その結果、人間関係においては、双方の自意識と自意識が激しくぶつかり、互いに相手を自己の意志の下に置こうとして覇権を争う。その結果、お互いの成長と新たな世界への始まりを約束する筈であった人間関係は、意に反して、終わりのない闘争の場と化し、修羅場となる。*The Rainbow*に続く長編小説*Women in Love*が描いているように、他のどんな人間関係にもまして、男女の自我がぶつかり合う時、闘争は特に、熾烈を極める。ロレンスはそこに現代人の精神的危機を見て取ったのである。こうした現代の精神的危機を目撃し、また自らも体験して、ロレンスは理知の弊害と限界を悟り、「血」へ回帰する必要性を一層痛感したのである。

最後に、ロレンスの資質も“otherness”の世界へ降下する機縁になったと思

(8) D. H. Lawrence, “On Human Destiny,” in *Phoenix II*, ed. Warren Roberts and Harry T. Moore (1968: rpt. Harmondsworth: Penguin Books Ltd., 1978), p. 623.

(9) Lawrence, “On Human Destiny,” in *Phoenix II*, p. 623.

われる。彼の自伝的小説*Sons and Lovers*の教える通り、ロレンスの母は豊かな教養をもった理知的な女性だった。一方、父は教育もなく教養こそとほしかったが直感と本能豊かな人だった。ロレンスは母の優れた知性を受け継ぐと同時に豊かで鋭い直感能力を父から引き継いだと考えられる。ロレンスに余り好意的ではなかったT.S.Eliotでさえロレンスの直感能力の鋭さと豊かさを認めている。A.Huxleyもロレンスと一緒にいると意識の辺境に連れて行かれるようだったと述べ、ロレンスが鋭い直感と本能のもち主であったことを示唆している。

3

現代文明の中に、理知を崇拝する伝統的な精神主義の破綻を見て取ったロレンスは軸足を理知から肉体へと移す。1913年1月17日、ロレンスはアーネスト・コリングス宛の書簡の中で「私の偉大なる宗教は血と肉の信仰だ。血と肉は理知より賢明だからだ。」（“My great religion is a belief in the blood, the flesh, as being wiser than the intellect.”）⁽¹⁰⁾と述べて自らの信仰を告白している。伝統的に理知を崇拝する西欧の精神風土にあっては、ロレンスの「血の信仰」はまさに驚天動地であったし、異教的であった。1933年に発表した有名な講演集*After Strange Gods*の中でT.S.Eliotはロレンスについて次のように述べている。

大事な点はロレンスが伝統と制度とは全く無縁のまま人生をはじめたことであり「内なる光」以外、他に成にも導き手を持たなかったことだ。しかもその光は全く信頼に値しない、道を誤らせる導き手であって、従来より、放浪癖のある人間に特有のものだ。

The point is that Lawrence started life wholly free from any restriction of tradition or institution, that he had no guidance except the Inner Light, the most untrustworthy and deceitful guide that ever offered itself to wandering humanity.⁽¹¹⁾

(10) Lawrence, “Letter to Ernest Collings,” 17 Jan., 1913, in *The Portable Lawrence*, p. 563.

(11) T. S. Eliot, *After Strange Gods* (London: Faber and Faber Ltd., 1933), p. 59.

伝統と制度に背を向けて、直感や本能という、得体の知れぬ「内なる光」のみを道案内とするロレンスの姿はエリオットの目には異様なものに見えたであろう。エリオットは伝統と教養を学ぶことで人間形成をめざす伝統主義者であったし、徹底した理知主義者だった。ロレンスが理知の対極にある肉体と血を唯一の導き手とすることに対して驚きと危惧の念を抱くのは当然といえる。エリオットにとってロレンスはまさに「異神を追う」異端児であった。

では、エリオットが危惧し、ロレンスが一生のよすがとした「内なる光」とはどのようなものであろうか。

ロレンスの「内なる光」は肉体や血の領域に存在するものであるが、無論、単に物質としての肉体や血ではない。ロレンスがそれを“fire”と呼んでいるところから、それは肉体の深層にあって、生動する「生命の炎」であることは事実である。これは、人間の意識の識閥を越えた無意識の領域をさす点ではフロイトの発見した無意識の領域と類似している。しかし、フロイトの場合、抑圧された感情の溜まり場的意味を含むのに対して、ロレンスの「生命の炎」は理知よりも賢明な叡智さえ備えた神聖な炎をさす点で大きく異なる。この点は先に引用したロレンスの「血の信仰」に関する宣言でみたとおりである。

もう一つ特徴をあげるならば、この「生命の炎」は外の自然界と反応し神秘的な交流を形成することだ。ロレンスはこれについて次のように記している。

人体の血漿すなわち原初的人間意識と外界の物質元素との間には靈妙にして複雑な感応と交流が存在する。

There certainly does exist a subtle and complex sympathy, correspondence, between the plasm of the human body, which is identical with the primary human psyche, and the material elements outside.⁽¹²⁾

ロレンスは一例として、海が月の動きに呼応して、潮の満ち干を起こすように、人間の血潮は潮の満ち干と呼応して上昇と下降を繰り返すことをあげている。人間の身体は月の光を浴びると夜の意識が目覚め、日の光によって

(12) Lawrence, "The Two Principles," in *Phoenix II*, p. 227.

昼の意識が目覚める。そればかりではない。樹木が四季折々変化するように、人間の身体も、意志とは無関係に、四季の移ろいに反応する。人体は樹木さながらに大自然を貫く四季というリズムに応じて反応するのである。従って、「生命の炎」すなわち“inner self”とは一言でいえば人間の「うちなる自然」といってよいであろう。

ロレンスはまた、この“inner self”を“otherness”「他者」とも呼んでいるが、“otherness”の特質を考える上で最適な作品は詩集*Bird, Beasts and Flowers*であろう。この詩集では、「鳥」、「花」、「木」など様々な動植物に顕現する“otherness”との出会いが詠われている。詩の内容からも、“otherness”は人間のみならず特有のものではなく、「鳥」、「蛇」、「蝙蝠」、などの動物はもちろん、「花」、「木」などの植物にも共通して顕現するものであることがわかる。また、この詩集に収められた「蛇」という詩は“otherness”の特質をもっとも良く表現している。この詩は、エトナ山が噴煙を上げるシシリー島で、ロレンス自身と思われる「私」という人物が、水飲み場にやって来た「黄金の蛇」と出会う場面から始まる。やがて眼前の「蛇」は未知の存在、すなわち「他者」(“otherness”)へと変貌する。「蛇」が変身したのではなく、「私」の認知の仕方が変わったのである。その瞬間、「私」は「蛇」の開示する「他者」すなわち「生命の根源」と出会う。しかし、やがて、われに返った「私」は恐怖の余り丸太を拾い上げ、「蛇」に投げつけ「蛇」を穴に追いやってしまう。「黒い蛇は無毒だが、黄金の蛇は毒がある」(“black snakes are innocent, the gold are venomous”)⁽¹³⁾と叫ぶ内なる教育の声が恐怖を引き起こしたからである。

「私」が「蛇」の開示する“otherness”と神秘的な出会いを体験するという、一種のエピファニーの瞬間を描いたこの詩は“otherness”を知るうえで示唆に富む詩である。先ず、ここでは、二つの認識法が提示されていることがわかる。一つは「教育の声」に象徴される「理知」による認識、もう一つは「理知」の対極にある「直感」による認識法である。そして、この二つの認識法は本来、同じであるはずの「蛇」をまったく別の存在として現出している。

「理知」による認識は、黒蛇は安全だが、目の前の蛇は「黄金の蛇」だから、危険な毒を持っている、と教える。一方、「直感」による認識は、見慣れた蛇

(13) D. H. Lawrence, “Birds, Beasts and Flowers,” in *The Complete Poems of D. H. Lawrence*, vol. one ed., Vivian De Sola Pinto and Warren Roberts (London: Heinemann, 1972), p. 350.

を、一瞬のうちに、未知の「他者」(“otherness”)へと変貌させる。ロレンスが、「蛇」を“otherness”「他者」と表現しているのは、「理知」の認識を超えたところで現出する異次元の実体であることを示唆するためである。「直感」の捉えた「蛇」はまさに、自然の摂理に従って生きる、神々しい光をまとった純粋な「生命の炎」そのものである。ロレンスは「直感」による認識がもたらす、こうした知識を「原初知」(“first knowledge”) ⁽¹⁴⁾と呼んでいる。一方、「理知」は黄金の蛇は毒を持つという認識しか与えてくれない。しかも、危険か否かを教えるこの認識は人間の思惑と先入観の入り混じった認識である。毒を持つという、「蛇」の持つ性質を伝えてくれているが、生命としての本質はなに一つ伝えてはいない。ロレンスはこうして、二つの認識法を提示することで、「理知」による認識の限界と、「理知」の認識を超えた領域すなわち「直感」による認識世界が確実に存在することを教えている。ロレンスは次のようにいう。

われわれには、直感を頼りとするときのみ認知でき、享受できる全一なる生の世界が存在する

There is a whole world of life that we might know and enjoy by intuition, and by intuition alone.⁽¹⁵⁾

「蛇」の詩は、上に述べたように、“otherness”は「直感」でのみ認知可能な「生命の炎」であることを伝えているが、人間と“otherness”との関係も暗示している。つまり、「私」が「教育の声」に負けて「蛇」を追放してしまう点から、“otherness”との出会いは容易ではないことがわかる。それは人間が、「蛇」のような無意識的存在ではなく、先天的に理知を備えた意識的存在だからである。しかも、その出会いは束の間でしかない。思考の牢獄に繋がれた人間の常として、すぐさま意識が目覚めるからである。

4

“otherness”へ参入するには「直感」という狭き門を通らねばならないが、

(14) Lawrence, “The Two Principles,” in *Phoenix II*, p. 227.

(15) D. H. Lawrence, *Selected Essays* (Harmondsworth: Penguin Books Ltd., 1976), p. 15.

門となる「直感」すなわち「血の意識」が目覚める場として、ロレンスは特に、男女の性的交わりと自然の世界を重視している。肉の交わりは「理知」を眠らせ、「血の意識」を優勢にするからであろう。自然の世界に分け入っていく時も同じである。自然界の無私性が人間の警戒心を解き、自意識をゆるめ、「理知」を後退させるからであろう。

肉の交わりでは、男は女の“otherness”と出会い、女は男の“otherness”と出会う。また自然界との霊交においても人間は自然の中の“otherness”と出会う。しかし、この出会いは一方的ではなく、双方向性を持っている。相手の“otherness”との出会いは自己の内なる“otherness”を直覚することでもある。では、自己の内なる“otherness”との出会いは何を意味するのであろうか。

「蛇」の詩では“otherness”は「生命の炎」を意味した。また“otherness”は潮の満ち干に呼応して生動する「内なる自然」であったし、人間の意志や意識とは別個の意志を持つ「血」であり、「肉」であった。しかし、ロレンスの場合、それは神性をもった聖なる「肉」を意味するので、安易な解釈は下せないが、種々の点から考えて、“otherness”とは人間の「肉性」と解釈して大きな間違いはないであろう。従って、自己の内なる“otherness”との出会いとは、自己の内なる「肉性」を自覚することである。では「肉性」の自覚とは人間にとってどのような意味を持つのだろうか。

人間の意識というものは時間の制約を受けることなく、過去、現在、未来を自由に行き来でき、しかも、老いというものもない。一方、肉体は樹木と同様、自然界の摂理の下に置かれている。肉体には春があり、夏があり、凋落の秋があり、再生の春へと続く死の冬がある。肉体の面から人間を眺めると、人間は「蛇」や樹木と同じく自然界の一生命でしかない。人間はもはや万物の長でもなければ、支配者でもない。「蛇」や樹木と同列の存在となる。従って、「肉性」の自覚とは生と死と再生を繰り返す、人間を超越した、自然界の摂理の受容と、自然の一部であることを認知することであるといっていよい。キリスト教では人間を全ての生き物の上位に位置づけ、自然界を統率する存在としている。これは、いわば人間を頂点とする垂直的人間観である。一方、ロレンスの行き着いた人間観は、人間を他の全ての生命と同列におく点で、水平的である。これは人間もふくめ、天と地の生きとし生けるもの全てを同列視する東洋的人間観に近いといえる。ロレンス文学の根幹をなす“otherness”信仰とは（「血の信仰」とも言うが）キリスト教的人間観から異教的人間観への脱出を企図した壮大な夢であったといえるだろう。とりわけ、

ロレンスの思想は、東洋的諦観に極めて近い性格を持っている。